

ビルマ地域研究における歴史学 ―「泰緬鉄道」と「ロヒンギャ問題」を事例に―

池田一人（IKEDA Kazuto）
言語文化研究科 / 外国語学部ビルマ語専攻



はじめに

はじめに

■自己紹介

■教科書の拙論

「泰緬鉄道建設をめぐる戦争記憶の比較史
―日本人将兵、イギリス人捕虜、ビルマ人労務者―」

■本日のテーマ：「地域研究における歴史学」

- ・現在の地域理解に資する歴史学
- ・「ビルマにおいて過去を見るという営みとは何か」
- ・フィールドにおける「歴史観」の問題



1. 泰緬鉄道建設をめぐる

1-1. 泰緬鉄道建設の記憶の比較史

■ 泰緬鉄道とは：

日本軍建設のタイ＝ビルマ間の415キロの鉄道、43.10完工
突貫工事、過酷な捕虜・労務者使役、

犠牲者：連合軍捕虜（英蘭豪米）**6.2万動員～1.2万死亡**
労務者（緬泰馬東印）**20万？動員～半数以上死亡？**

■ 戦後の日本＝欧米間の「トゲ」：

旧捕虜側：「旧日本軍の戦争犯罪」告発
旧日本軍側：反発、贖罪・和解活動

■ 地元側の沈黙：

労務者の希薄な記録・告発：ビルマ・タイ・マレー・東インドなぜ？
「捕虜」と「労務者」の集団性の違い、など

1-2. 現代ビルマへのフィードバック

■ ビルマにとって「泰緬鉄道」とは何だったのか？

文学作品化：Lin Yon Thit Lwin『死の鉄路』1968など
＝ナショナリズムに回収される戦争記憶

日本軍の告発希薄 < ビルマナショナリズムの栄光を写す鏡
→ **ビルマ人の過去の見方 + ビルマNの現在（未探求）の問題**

■ 歴史観の問題

- ・ 地域研究における歴史学の重要テーマ。
歴史が現在とつながる局面、地域研究の関心における歴史
- ・ もうひとつビルマからの事例：
ロヒンギャ問題：「ロヒンギャはビルマ人か」という問題に見る、ビルマにおける過去の見方を検討する。



2-1. 問題の展開

■ 「ロヒンギャ」とは？

ラカイン州のムスリム、**100万**人口、
ベンガル語チッタゴン方言のひとつ

■ 2012年の衝突と難民流出：

5月 ラカイン州ラムリーでレイプ事件
6月 ラカイン仏教徒とムスリムの大規模衝突
→ ボートピープル流出（**15万**）

■ 2016年からの武装闘争化と大規模流出

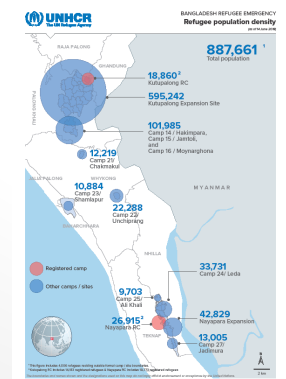
10月 ロヒンギャ武装組織の襲撃～国軍による焼討
→ 大規模難民化（**80万**）

■ 膠着化

国内：反「ベンガリー」感情、衝突、過激仏教僧
国外：国際社会の批判、ASSK政権への批判

■ なにが問題か？

難民、人権、民族、宗教 ... + 歴史認識の問題



2-2. 歴史的背景

- ムラウー朝期（1430-1785）：
西隣はムスリム世界、港市の仏教王朝、宮廷/王自身もイスラーム的要素
- コンバウン朝期（1785-1826）：
ビルマ王朝に征服される。多数の住民が王都へ連行される。
この中にイスラーム教徒もいた。「Rooinga」の記録。
- 植民地期（1826-1948）：
民族・宗教別の統治体制、ベンガル系の移民労働者流入
- 日本占領期（1942-45）：
愛国アラカン軍（日+ラカイン仏教徒）× Force V（英+イスラーム教徒）
- 独立後の議会制民主主義期（1948-62）：
仏教徒議員×イスラーム教徒議員、ラカイン州とMayu地区設立
- ネーウィン期（1962-88）：
国軍によるムスリム弾圧の開始、78年に最初の難民流出（25万）
- SLORC・SPDC期（1988-2011）：1991年に2度目の難民流出

2-3. ロヒンギャはビルマ人か？

- 当事者：
ビルマ人・ラカイン人：「**原住民族のリストにない**」
ロヒンギャ：「**王朝時代からラカイン地方にいたムスリムだ**」
- 民族形成過程：
名の認知：3度の難民流出の報道：1978、1991、2012
名の起源：18c末の「Rooinga」の意
1950s はじめてのRohingyaの政治使用（議員・武装組織）
2000s ラカイン州の田舎のムスリムは「ロヒンギャ」意識ない
2016～ 難民キャンプで急速に「ロヒンギャ」意識が深まる
- しかし、この説明ではロヒンギャ問題の当事者は納得しない：
→ 外部者の/学術的な歴史認識 ≠ 当事者にとっての「真実」
→ 当事者の歴史観の問題：そのありかた？

3. ラカイン人とイスラーム教徒

3-1. ラカインにおけるムスリム

- M. Charney【積極的なロヒンギャ肯定論】：
ロンドン大SOAS教授。もともとラカイン史研究でビルマ研究始める。
「ムラウー王10代まではイスラーム称号保持、宮廷にはムスリム廷臣、王朝下に多くのムスリム包摂、後半から仏教徒＝ムスリムのあいだで緊張始まる」
→ **ラカイン史でイスラームは必ずしも他者でない**
- Aye Chan【穏健なロヒンギャ排除論】：
元神田外大教授。ラカイン人でラカイン史研究。ラカイン国際団体元会長。
「4種のムスリムがいる：①Mayu地区のチッタゴン・ベンガル人、②王朝期からの居住者、③カマン族、④ビルマ中央部ミエドゥからの移ムスリム」「最大多数は①の植民地期の流入者」
→ **大多数のムスリムを、植民地期の移民労働者とみる見方**
- 論点
M. Charney：「王朝期のイスラーム教徒」～「ロヒンギャ」
Aye Chan：「植民地期のベンガル移民」～「ロヒンギャ」
→ ふたつの「つながり」はどのようにして証明が可能なのか？
（ビルマ（SEA・SA）の庶民世界では、往々にして2代前はすでに不分明）
→ 「ラカイン人」はどのようにラカイン人なのか？

3-2. ラカイン人とは誰か？

■ 伝統的ラカイン史の構造：

現在は「ビルマ史の中の一地方史」「一族史」
当事者のラカイン人は独自の王朝史と歴史圏を主張

- ① ダニャワディ期 (BC3000～AD370)
- ② ウェータリー期 (370頃～1000頃)
- ③ レームロ期 (1018～1406)
- ④ ムラウー期 (1430～1785)

■ 「10世紀の断絶」：

ラカイン語：言語学的にビルマ語の一方言
ビルマ語族の南下は9～10c (G. Luce)

⇒ **ラカイン第1・第2王朝は誰のものか？**

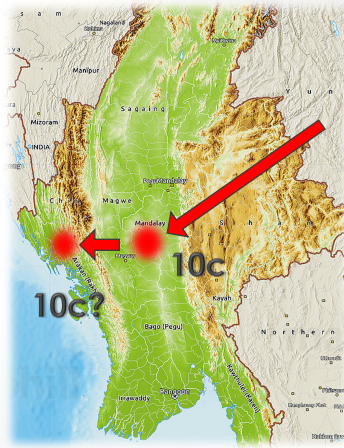
■ Aye Chanの説明：

「ダニャワディとウェータリーの支配者は
チベット＝ビルマ語系であった」

■ 論点：

「チベット＝ビルマ語族」という語族分類は、
18c末にヨーロッパに生まれた歴史言語学が19cに定説化した知見ではないか？

ナショナリズム史観が近代言語学的知見をもって「ラカイン史」を構築する試み？



3-3. アーナンダサンドラ碑文

■ 8世紀と16世紀

考古学的な理解：10c「ラカイン王朝」はベンガル系
ところが、前近代のラカイン王はこの「10世紀の断絶」
を軽々と乗り越える。

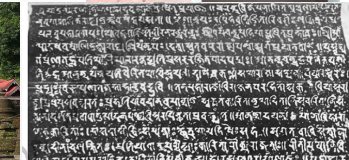
■ 「アーナンダサンドラ碑文」：

ムラウー王都のシッタウン・パゴダ入り口に保存。
もともとはウェータリー時代の729年の刻文。

ムラウー朝初期のモンバグリー王 (r.1531-1553) が9マイル離れた旧ウェータリー王都跡からムラウー王都に運ばせた。そのうえで、自らの事績をこの碑文に書き足す。

■ 王統にとっての過去

**正統性主張という現在のニーズに依拠
16cにおける過去の捉え方**



おわりに

おわりに

■ ビルマ地域における、過去の捉え方について3つの事例を見てきた

「泰緬鉄道建設におけるビルマ人労務者」

「ロヒンギャとラカイン人」

「アーナンダサンドラ碑文」

■ コメント

① 前2者は、ナショナリズムが過去のあり方を規定していることが見て取れる。

→ この意味でのビルマ大衆ナショナリズム研究は、まだビルマ地域研究の領域
では深められていない。

② 「ロヒンギャ」や「ラカイン」が何者かは、歴史が自明に語ってくれるわけでは
ない。むしろ、「現在」における政治的意思がそれを語る。

= 「ロヒンギャ問題」の解決は、歴史理解ではなく、現在の政治的意思の問題

③ ビルマにおける「過去」は日本や欧米におけるそれとは、随分異なるらしい。
しかし、これを「ビルマ世界に特徴的な過去の捉え方」と本質主義的に規定する
こともできない。この「過去の捉え方」もまた変容していく。

参考文献

エーチャン 2011.「ヤカイン世界」伊東利勝編『ミャンマー概説』めこん社

Al Jazeera (Shakeeb Asrar). 2017. *Rohingya crisis explained in maps — A visual explainer of the unrest in Myanmar that has forced around one million Rohingya to flee their homes*. 28 Oct 2017 10:38 GMT. (<https://www.aljazeera.com/indepth/interactive/2017/09/rohingya-crisis-explained-maps-170910140906580.html>)

Aye Chan. 2005. The Development of a Muslim Enclave in Arakan (Rakhine) State of Burma (Myanmar). *SOAS Bulletin of Burma Research*. Vol.3. No.2., 2005.

and Islamdom converged: religious change and the emergence of Buddhist communalism in early modern Arakan (fifteenth to nineteenth centuries). A dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy (History) in the University of Michigan.

Charney, Michael W. 2005. "Theories and Historiography of the Religious Basis of Ethnonyms in Rakhing (Arakan), Myanmar (Burma)." A Paper originally presented at the Workshop, "The Forgotten Kingdom of Arakan: A Public Seminar on the People of Present Day Arakan State of Myanmar," 23 November 2005, First Hotel, Bangkok, Thailand, listed under the title of "Buddhism in Arakan: Theories and Historiography of the Religious Basis of Ethnonyms".

Kirichenko, Alexey. 2009. *From Ava to Mandalay: Toward Charting the Development of Burmese Yazawin Traditions*. *Journal of Burma Studies*. Vol. 13. No.1

Thant Myint-U. 2001. *The making of modern Burma*. New York: Cambridge University Press.

Leider, Jacques P. 2006. "Arakan's Imagined Place in the Theravada World between Burma, Sri Lanka and the debate on the Continuity of the Sasana." *Burma Studies Conference "Communities of Interpretation" NUS/ Asia Research Institute, Singapore, 13-15 July 2006*.

Leider, Jacques P. 2018. "Rohingya: The History of a Muslim Identity in Myanmar." *Oxford Research Encyclopedia of Asian History*. DOI: 10.1093/acrefore/9780190277727.013.115

UNHCR. 2016. *Mixed Maritime Movements: In South-east Asia In 2015*. UNHCR Regional Office for Southeast Asia. February 2016. (<http://www.refworld.org/docid/57d00e3c4.html>)

UNHCR. 2017. *Mixed Movement in Southeast Asia*. UNHCR Regional Office for Southeast Asia. April 2017. (<https://unhcr.atavist.com/mm2016>)

Zaw Lynn Aung. U. 2014. "Demographic Study on Sittway (Akyab) in the Early Colonial Period (1826-1885)." *Journal of the Myanmar Academy of Arts and Science 2014*, Vol. XII. No.9. Department of Higher Education, Ministry of Education, The Government of the Union of Myanmar.